

ルリンドウ *T. distylum* J. MURATA et YAHARA のわずか二種が知られている。前者は液果をもち、日本列島に広く分布し、後者は蒴果をもち、近年鹿児島県屋久島から報告されたものである。1987年8月、筆者は、前二者とは異なる新種を長野県西穂高岳にて発見した。本種は、亜高山帯上部のオオシラビソ *Abies mariesii* の林床に生える。液果をもつ点で、ツルリンドウに似るが、茎が短くて巻きつかない、花は小さく、萼片は線状皮針形で左右から扁平とならない、果実が翌年の花期まで宿存すること等により明らかに区別される。和名のテングノコヅチは、宿存する紅紫色の果実を「天狗の小槌」と見立てたものである。ツルリンドウ、ハナヤマツルリンドウ、テングノコヅチの検索表は、次の通りである。

A. 果実は蒴果。萼片はほとんど左右から扁平でない。茎は螺旋状に巻きつく。果実は翌年の花期に存在しない。

.....ハナヤマツルリンドウ

A. 果実は液果。
B. 萼片は針状線形、左右から扁平で筒部に流れ翼となつてつく。茎は螺旋状に巻きつく。果実は翌年の花期に存在しない。

.....ツルリンドウ

B. 萼片は線状皮針形、左右から扁平でない。茎は螺旋状に巻きつかない。果実は翌年の花期まで宿存する。

.....テングノコヅチ

(Received Oct. 5. 1987)

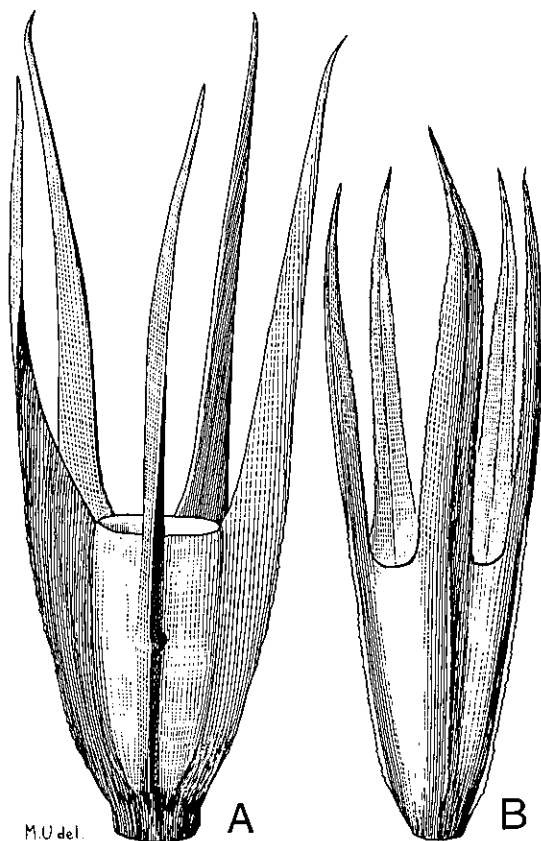


Fig. 4. Calyx

A. *Tripterospermum japonicum* (×9)

B. *Tripterospermum involubile* (×9)

○ 里見信生 折々草 自己出版。昭和63年3月1日発行。B5判、176頁。頒価3,500円(送料込)。

里見信生先生の金沢大学停年退官を記念して“折々草”と題した雑文集が出版された。多趣味な先生らしく、内容はアマゾン学術調査に関する論文から、植物随筆、紋章学、趣味の落語まで、多彩なものとなっている。

題名は、序文に記されているが、先生が兵役についていた間、銃を持って這ったり走ったりの演習のさ中、摘まみ取った草木をノートにはさんで記録していた、その小冊子の名に由来する。今でこそなつかしいが、当時は相当な悲壮感のもとでの採集であったと聞いた覚えがある。

本書、2代目“折々草”は、その多彩な内容の中に、その題名の由来と同じく、先生にとって心に残るエピソードがちりばめられている。里見少年の牧野富太郎先生との出会い(老先生と少年、146頁)、ブヨとダニに耐えての必死のアマゾン行(アマゾンのかゆい虫たち、93頁)、天皇陛下への御説明(塩屋海岸と気多大社での思い出、143頁)等の出来事が、先生独自のユーモアのある名文で再現されている。思うに先生においては、本職の植物学と、帽章のコレクションや落語といった趣味が、豊かなバランスを作り上げている。巻頭の植物随筆も、そのパーソナリティの豊かさを反映して、非常に暖いものとなっている。植物を友とする多くの人に、本書をお勧めする。入手御希望の方は、里見信生先生(〒921 金沢市久安4の359)に現金書留にてお申し込みを。

(綿野泰行)

○ ヒロハスギナモ北海道に産す (藤原陸夫*) Rikuo FUJIWARA*: *Hippuris tetraphylla* L. fil. Newly Found in Hokkaido

日本植生誌 (宮脇昭編著 至文堂 全10巻) が1980年より継続刊行中であるが、各地方での植生調査の際の識別困難な植物、主としてイネ科、カヤツリグサ科等について同定を依頼される機会がある。1987年は北海道の植物が送られてきたが、その中に *Hippuris tetraphylla* L. fil. (北海道厚岸町厚岸湖 June 24, 1987 藤原一絵) が含まれていた。写真のように、全体の形状や生育地から一見してウミミドリを思わせ、調査者も当初そのように考えたようであるが、疑問を感じ、花実のある完全標本を採取している。乾燥すると茎葉が黒変し、ウミミドリの様相は呈しない。

付帯されていた植生調査票によれば、海水の出入りする塩沼地、調査時の水深2cm、群落高20-30cm、植被率90-100%、出現種数3-4、被度ヒロハスギナモ5、ノルゲスゲ、ヒメウシオスゲ等+-3。

スギナモ科は1属3種からなり、スギナモ *H. vulgaris* L. と *H. montana* LEDEB. (アリューシャン、アラスカ地方等に稀) の2種は湧水池や流水中に生育するが、ヒロハスギナモは周極地方の海岸塩沼地に生育する。ヒロハスギナモは日本近辺では樺太に分布し、樺太植物誌III (菅原繁蔵, 1940) に良い図が載っている。

Hippuris tetraphylla L. fil. — Akkeshiko Akkeshi-cho Hokkaido, in brackish water (Kazue FUJIWARA, June 24, 1987, KANA No. 123854 and TUS). Photographed by Dr. Kazue FUJIWARA, June 24, 1987.

(Received Feb. 15, 1988)

* 〒010 秋田市中通6丁目6-36 秋田県立秋田東高等学校 Akita Higashi High School, Nakadōri 6-6-36, Akita 010.



Fig. 1. *Hippuris tetraphylla* community

○ 北海道林務部編 渡邊定元著 北限のブナ林 北海道林業改良普及協会 (〒060 札幌市中央区北2条西19丁目), 昭和62年3月発行。A5版, 180頁+口絵 (カラー) 8頁。定価1,500円。

古くから議論のある黒松内低地帯の北限地のブナ林について、著者と北海道林務部の長年の調査結果を踏まえてその実態を詳細に描き出し、なぜ、ここにブナ林があるのかについて迫った力作。 (鈴木三男)

- Minami-Iwojima Island (Ins. San Augustino), the Volcano Group of Islands, Japan. *In*: the Conservation Reports of the Minami-Iwojima Wilderness Area, Tokyo, Japan. p. 61-143. Nature Conservation Bureau, Environment Agency of Japan.
- ONO, M. and S. KOBAYASHI. 1980. Present situation of the endemic land plants of the Bonin Islands. *In*: Report of the Present Situation of the Natural Environment of the Bonin Islands. p. 54. Tokyo Metrop. Office.
- and —. 1985. Flowering plants endemic to the Bonin Islands. *In*: M. ONO and K. OKUTOMI ed. Endemic Plant Species and Vegetation pp. 1-96, Aboc-sha, Kamakura.
- SATOMI, N. 1982. Orchidaceae. *In*: SATAKE et al. Wild Flowers of Japan I. pp. 187-235, Pl. 170-208, Heibon-sha.
- SCHLECHTER, R. 1906. Fedde Report. Spec. nov. veget. Beihefte 2: 169, 171.
- TUYAMA, T. 1935. Plantae Boninenses Novae vel Criticae I. Bot. Mag. Tokyo 49: 369.
- . 1937. Plantae Boninenses Novae vel Criticae IX. Bot. Mag. Tokyo 51: 130.
- . 1938. Plantae Boninenses Novae vel

- Criticae XI. Bot. Mag. Tokyo 52: 464, fig. 1.
- . 1939. Plantae Boninenses Novae vel Criticae XIII. Bot. Mag. Tokyo 53: 2, fig. 1.
- . 1984. On *Goodyera augustini* TUYAMA. Journ. Japan. Bot. 59: 153.

摘要

硫黄列島を含めた小笠原諸島からは、中井、小泉、津山、Schlechterらにより1968年の返還以前に14種のラン科植物が報告されている。その後(1980, 1983)筆者の記載した種を加えて11属16種が確認されており、その中、硫黄列島産の広分布種2種(ツルランとキンギンソウ)を除いた14種までが固有種とされている。返還後同島の陸上植物の調査を担当した私は、特にラン科植物の現況と固有性を明かにしようとした。全種に関しての比較検討はまだ十分でないが、今までの調査をもとに、最近相ついで出版された沖縄、台湾、ジャワ、マレーシアなどのフロラやランに関する文献を参考に、小笠原ラン科植物の現況と形態的特徴、近縁種と思われる種との関連性や分布について述べ、小笠原産ラン科植物の固有率の高さを再確認した。又、私が新種として記載した2種を中心に、植物地理学的考察を試み、その現況と保護の必要性にも触れた。各種の分類学的取扱は別校に譲る。(Received September 20, 1987)

○ 里見信生・小牧旌 石川県樹木誌図譜 石川県林業試験場 発行(購入申し込み先:〒921 金沢市増泉4丁目10-35 石川県山林協会 TEL.(0762)42-7221, 頒価7,000円, 送料500円), 26.2cm×19.6cm, 48+430(図版)+53ページ。

先に著者の一人、里見信生教授によって執筆編集された石川県樹木誌(1977)と一体となすもので、その図譜である。石川県樹木誌には、標本で確認された391種が記載されているが、本書では新たに採集されたものを追加した430種の図(1頁に1種類)が掲載されている。なお、巻末に新産地、誤記の訂正、追加の種類の目録があり、石川県樹木誌をこの点でも補完するものとなっている。

「序」にある通り、図はおもに小牧旌氏の労作がもとになっているが、里見教授により詳細な追加図、解剖図が加えられ、充実した図譜になっている。図の殆どは石川県産の材料によっているので、この地方の種類の特徴がよくでており、今後この地方の植物を研究する上で不可欠な参考文献となるであろう。また、石川県および北陸地方の樹木の殆どは容易に同定できることになったので、研究者・専門家のみならず、教師、植物愛好者など広範な人々に歓迎されるであろう。

残念なのは、予算の関係があつて準備された写真と図の記載文が割愛されたことである。草本と異なり、樹木の全体像や樹皮の特徴は図に描くことが難しく、写真は図を補う重要な手段である。また、図は植物画の手法により典型を描くわけであるから、植物で特に著しい変異の幅を始め図化できないことが少なくなく、記載文なしでは、著者として極めて心残りであられるであろうと拝察する。もっとも、記載文については他の成書を参考にすることもできるが、やはり、この地方の種類について行き届いた記述はできないわけで、いつの日にか折角の原稿が生かされるよう祈念してやまない。とはいえ、財政難のなかで林業試験場はじめ関係者の努力で、この貴重な図譜が世にだされたのであるから、著者の先生がたと併せて行政関係者各位に敬意を表するものである。ぜひ、貴重な本書を会員並びに読者の手元に置かれるよう、御薦めする次第である。なお、少数の部数は里見信生先生のところ(〒921 金沢市久安4-359)にも準備されている由であるので、こちらに申し込まれてもよい。

(古池 博)

- Stellaria* in Japan I. J. Jap. Bot. 40: 90-96.
 —. 1965b. A conspectus of the genus *Stellaria* in Japan II. J. Jap. Bot. 40: 250-256.
 OHWI, J. 1965. Flora of Japan. p. 428-431. F. G. Meyer, and E. H. Walker, ed., Smithsonian Inst., Washington.
 STEBBINS, G. L. 1974. Flowering plants: Evolution above the species level. The Belknap Press of Harvard Univ. Press, Cambridge, Massachusetts.
 TABATA, H. 1964. Vessel element of Japanese birches as viewed from ecology and evolution. *Physiol. & Ecol.* 12: 7-16.

摘 要

日本産ハコベ属12種の茎(地上茎・地下茎・花柄・小花柄)の構造の比較を通して、茎が繁殖に果たす役割を記述し、茎からみた生活型の進化について論じた。地上茎には①直立茎②節から発根しない平伏茎③節から発根する匍匐茎④表皮と皮層を失う剝離茎の4類型がある。①は5種の地下茎多年草に特有で、種子繁殖に貢献し、②は2種の一年草に特有で種子生産のための物質の輸送をおこなう茎である。③は3種の常緑多年草と2種の通性一年草(一年草としても多年草としても生活できる種)に特有で容易にちぎれてラメートとなり、栄養繁殖をおこなう。直立茎以外の地上茎と地下茎は、成熟に伴って通導組織が増大して表皮と皮層を失い、剝離茎・剝離地下茎となる。組織と器官の特殊化の少ない順に種を配列し、種を類別する構造上の特徴に注目した。そ

の結果、12種は、次の6群に類別された。①周皮を形成せず、剝離茎をもたない常緑多年草のサワハコベ(*S. diversiflora*)。②木化した周皮をもち、花茎をもたない、サワハコベ以外の常緑多年草。④集散花序をささえる花柄が分化し、花柄に木化した内皮と髓腔をもつ通性一年草と一年草。③他の地下茎多年草と異なり、花柄に木化した内皮と髓腔をもたず、肥大した根をもつ地下茎多年草であるオオヤマハコベ(*S. monosperma*)。⑤花柄に木化した内皮と髓腔をもつ2種の地下茎多年草。⑥⑤にくわえて木化した上皮を直立茎内にもつ2種の地下茎多年草。この類別は、オオヤマハコベが平行進化の結果地下茎をもつにいたったことを示唆する点と、通性一年草・一年草の区別がなされない点を除いて、前報で提出した生活型の進化の図式(地下茎多年草←常緑多年草→通性一年草→一年草)とよく一致している。ハコベ属の茎の進化は、花柄・地下茎・肥大根といった新しい器官の出現と、それぞれの器官の出現のうちに起こった、木化組織の特殊化による通導の機能・種子繁殖の能力の増大・草丈の増大といった傾向によって特徴づけられる。木化組織の細胞層の数と草丈の間の関係をプロットすると生活型ごとにほぼまとまり、全体としての正の相関が見出され、ハコベ属における進化の一般的な方向性を示している。木化した表皮をもたず、周皮形成もおこなわないサワハコベは、もっとも組織の多様性が小さく、この種が生活型の進化における祖形と見なしうるという前報の推定を支持している。

(Received January 27, 1988)

○ 福島県植物誌編纂委員会編 福島県植物誌 福島県植物誌編纂委員会(〒970 福島県いわき市自由ヶ丘10-9, 湯沢陽一方), 昭和62年12月1日発行。B5版, 482頁+64頁(カラー16頁, 白黒48頁)。定価7,000円(送料を含む)。

本書を開くと、まづ福島県の植物研究史からはじまり、本県出身者である草野俊助・小林 勝・田代善太郎・根本莞爾などの研究成果の他、大井次三郎・小泉源一・武田久吉・中井猛之進・原 寛・早田文蔵・本田正次・矢田部良吉などが、本県植物の研究に残した業績を記している。しかし、一県のフロラの解明は、これに加えて県内在住の研究者の果された役割は極めて大である。

その結果、本書においては、苔類216種、薊類530種、羊歯植物205種、種子植物2,452種が記録された。

○ 神奈川県植物誌調査会編 神奈川県植物誌 神奈川県立博物館(〒231横浜市中区南仲通5-60), 昭和63年3月15日発行。B5版, 1,442頁。頒価10,000円。

あとがきに、“本書は従来の各県の植物誌とは異なる点がかなりある。それは単に異色であるというだけでなく、今後地域の植物誌を編纂するにあたって参考に成るべき点が少なくないと思われる。”と本書の完成に貢献された大場達之氏は自信を持って述べて居られるが、それは、もっともなことで、全県下に居住する150名をこす多数の方々の協力により、収集された標本は12万点を越えると言うのであるから、とにもかくにも大変な苦作であることに相違なく、紹介者が述べるまでもない。

内容は、シダ植物・種子植物を扱い、各種の特徴を示す部分図のほか、神奈川県を108個のメッシュに分けて分布図が掲載されている。確かに県単位による植物誌の白眉になるものと言って過言であるまい(里見信生)